

# 韋 編

いへん

愛知大学図書館報

No. 30

「韋編」……文字を書いた竹や木の札を、なめし皮の紐でとじた上古の書物。

## 情報の集散拠点としての図書館

図書館長 南 龍 久

この度、私は愛知大学図書館長に就任しました。この分野の知識・経験に乏しい私が、図書館の運営の重責を担えるかどうか心許ないかぎりですが、今後は、図書館員をはじめ皆様のご指導とご協力をえてこの責を果たさなければと思っています。

さて、教育・研究機関としての図書館は、今、どのような役割を担うところとなっているのでしょうか。このことを私なりに考え、併せて図書館の最近の新たな取り組みを紹介して、多くの方々に多大の関心を寄せていただきたいと思います。

図書館規程をみるまでもなく、図書館の「目的」は研究と教育に必要な図書その他の資料を収集・管理し、学生、教職員および館長が許可した者の利用に供することにあります。これを基に考えますと、第一に重要なことは、図書館はこれまで人類が営々と蓄積してきた知や情報を収集・管理し、これを多くの利用者に提供するという任務を果たすところ、つまりは情報の集散拠点であるということです。この点は、今日のように高度IT化社会になってもその重要性は変わりません。むしろ、そのノウハウやシステムを生かして、例えば図書・資料の内容のデータベース化、CD-ROMなどの形態をとって組

織的かつ効率的に蓄積された膨大な情報を、多様化している利用者に向けて系統的に提供しなければなりません。今日の図書館には、その意味で図書・資料の貸出を行うという図書館本来の役割の充実が求められています。

また、ここに利用者というばあい、本学の学生、教職員はもとより、今や一般社会人にまで広がっています。一般社会の人々のニーズに応じた知や情報の提供を、IT化に適合した様々なサービス機能によって実施していくという方向を積極的に探求するのは、図書館の今日的な使命の一つであります。本学図書

館は、地域社会に開かれた図書館を目指し、最近、新たなサービスをもって卒業生や一般社会人の利用の可能性を広げてきています。こうして情報の集散拠点としての図書館の役割は、今、確実に学内外に向かって浸透しつつあるといえます。

ところで、このように図書館を情報の集散拠点と見做すとなれば、次に出てくる第二に重要な問題は、膨大かつ継続的に収集される知や情報をどのような方法でそれぞれの利用者に効率的に発信し、提供するかということです。これには、前述のようにIT化に適合するという観点が不可欠であり、それとの関わりでいえば図書館は新たな機能を徐々に拡



充し実施に移してきており、実はこの点が最近の顕著な特色となっているのです。図書館の最新の取組みについては、既に学内の他の媒体を通じてお知らせしてきていますが、ここに改めて最近の新たなサービス機能のいくつかを紹介して、蓄積された知や情報を積極的に活用していただく上での一助としたいと思います。

大きな取組みは、図書館新システム導入によるサービス向上です。これは愛知大学図書館（豊橋・名古屋・車道）が今年10月より準備し、この度その新サービスを開始したものです。これには、①学生・教員ともユーザIDとパスワードを登録して、OPAC検索画面から蔵書検索・新着圖書の照会はもとより、貸出中圖書に予約を付けたり、自分の貸出中圖書や予約圖書の照会ができるようになったこと、②教員はその他購入申込・発注状況の照会ができるようになったこと、③OPAC上で、著者一覧やシリーズ一覧の情報が簡単に見られるようになったこと、④中国語の簡体字や韓国語のハングル文字がOPAC上で表示できるようになったこと、があげられます。なお、同システムによる他のサービス機能は、今後経過をみて追加していくことになります。

さらに、上記新システム導入に先立ち、既に今年4月より、いくつかの点で利用者へのサービス向上に努めてきています。開館日の増加、車道図書館開館時間の延長、卒業生・一般社会人への図書貸出・外部データベースの検索の可能性の拡充など様々です。また、名古屋図書館での新たな試みとして「学部別・新入生向け図書コーナー」を新設するか、今後は図書館ガイダンスと入門ゼミ・専門ゼミとの連携、とくに教員の講義との連携に積極的に取り組めるよう検討しているところ です。

以上、図書館における最近の種々の新サービス機能を紹介してきましたが、ここで将来を見据えて、いふなれば図書館の担う現代的

な役割の質的高次化を指向するという観点にもとづくとき、どうしても軽視することのできない重要な課題があります。それは、図書館のレファレンス・サービスの充実という問題です。

利用者各人の関心事や課題に応じて相談をうけアドバイスするという図書館のレファレンス・サービスについては、公共図書館ならどこでも実施しています。むろん、大学は教育・研究機関ですから、探求すべきレファレンス業務の性質や方法について公共図書館のばあいと自ずから異なってくると思いますが、基本的方向としてはこれからの大学図書館にとってこの機能の充実が賦活剤となり、戦略的意義も大きいといえます。それだけに、本学図書館ではレファレンス担当者の増員が望まれ、このことが焦眉の課題の一つであると思われま す。

このように図書館の将来的可能性を考えるとき、もう一点無視できないのは三校舎に置かれている図書館の相互連携・協力体制の問題です。三つの図書館はそれぞれ異なる学部教育・研究分野などを基盤としている以上、それぞれのもつ独自色を生かすのは当然であり、それを前提として三拠点が連携・協力の体制をどう維持し強化していくかということです。とくに図書・資料の貸出業務を超えたレファレンス業務ともなると、一層のネットワーク化を通じての連携・協力体制の構築が必須となるでしょう。三校舎間の連携・協力の必要性は、愛知大学のどの領域においても求められますが、とりわけ図書館の効果的な運営にとってはこれまた重要な戦略的意義を有していると考えま す。

図書館は蓄積された知や情報の集散拠点であると述べてきました。本学のばあい、この種の拠点を、三校舎の連携・協力体制を通じてどう発展させるかが重要な課題です。学生、教職員、卒業生および一般社会の人々から有益な知恵と情報が発信されるよう切望します。

## 図書館と／で出会う

短期大学部助教授 安 智 史

数年前の夏、宮沢賢治の足跡をたずねて東京都大島に研究仲間数名とともに赴いたことがある。軽乗用車をつつを頼ってお借りして、元町郊外のこのあたりが賢治に農学校開設を相談した人物（賢治にとってはその妹とのお見合いもかねていた）の住んでいたあたりだろうか、とか、さらには、川端康成「伊豆の踊子」の踊り子たちが働いていたのはこのあたりかと、なるほど野口雨情の歌とはちがって海に夕陽はおちない波浮の港周辺の、遊廓の痕跡を尋ねたりと、フィールドワークとしての収穫は多々あったのだけれど、ひよっとするとなよりの収穫は、その島の町立の図書館であった。

なにか、郷土関連書籍の特集コーナーでもあれば、と思って立ち寄ったもので、そういう町立の図書館は一般にごく小さく、それほど多大な期待はできないと思っていたのだけれど、それでも、その島で戦前発行されていた新聞のかなりの部分が保存されていて、一般の公立図書館最大の難点はなんといってもこういった定期刊行物の保存がまるでなされていないということなものであるから感激し、こういった同時代資料、もっとありませんか、と、その図書館の職員の初老とおぼしき職員にお訪ねしたところ、ある種、いい年して子どもっぽくよろこんでいる我々（もちろん、図書館で騒ぐなんてことはやっておらず、きつと我々のまわりにそういう雰囲気か漂っていたのか、あるいは図書館好きの天使でも付いていたのならいいのだけれどもっとおどろおどろしいものに取り憑かれていたかもしれない）の様子を察したその職員さんが、それじゃあ、地元でそういうことを調べている方に連絡とって差し上げましょうか、ということで早速、島の中学で教えながら調査研究を続けていらっしやる時得孝良氏を、紹介し

てくださったのだった。我々は時得氏のまとめた資料の冊子をいただき、また、島の戦前をよく知る古老も紹介いただいたりして、島の海鮮丼や温泉やくさやもよかったのだけれども、なんといってもこの豊かな知的饗応に感激し、結果として上記の諸収穫を得ることができた。

これは、その蔵書規模そのものとは別に、豊富なひとびとの知的ネットワークの結末点として図書館が機能しているという点で心に残った例であるのだけれど、やはり図書館というのはなんといっても、出会いの場なのではないだろうか。新刊の大規模書店や古書の専門書店などにも、又ちがった出会いがあつてそれはそれでとてもいいものであるのだけれど、過去の資料の収蔵庫でもある図書館には、時の流れのなかで醗酵しいまが読み時、といった感じで読者の読解を待ち受けている書籍や定期刊行物の積み重ねがある。

もっとも、そのときどきではたいして重要性が認められず時の醗酵作用によって何十年かして重要性の増すことが多いという例としてもっともわかりやすいであろうコミック誌や女性誌（むしろ「婦人誌」というべきか）は、(NACSIS Webcatで検索しうる限りでの)全国の大学図書館はもちろん国会図書館にも所蔵されていないものが多々あつて、そういう場合は高い入館料やコピー代を払ってでも早稲田にあるまんが図書館や八幡山の大家壮一文庫にでも赴くことになるのだけれど、コミック誌はともかく大正や昭和戦前の婦人誌の所蔵で意外に穴場なのが駒場にある日本近代文学館で、べつに婦人誌でなくとも自分の専攻である近代日本文学の専門図書館なので雑務の合間をなんとかやりくりしたりあるいは長期休暇期にこちらに赴いたりすると、いづれ事情は同じと思われる、やはり日本各地

に赴任している友人知人と遭遇することがある。たまにはこちらの存じ上げない方に声を掛けていただいて恐縮することもあるのだけれど、これもたとえば夏休みなどに上京し、とにかく費用を切り詰めて安宿に連泊して、限られた時間内に資料を集めようといくつもの図書館を巡り歩いているときなど、豊富な資料に出会う、ということは時にこちらの知の貧弱さを実感させられて打ちのめされたような気持ちにさせられるということでもあり、そういうときには、自分がささいなとはいえ時間と費用をわざわざ割いて成果のおぼつかない徒労を重ねているような気持ちにもさせられて意気消沈し、自分のいまいるこの閲覧室がなんともよそよそしい表情を浮かべはじめていたたまれなくなる場合もある。そういうときに、資料請求カウンターやロビーなどでやはり切り詰めた事情のなかで時間と労力を割いてやってきた知人・友人にたまたま出会ってあいさつを交わし、だいたい彼も我も事情は同じで限定された時間内にできうる限り多くの資料を確認しなければならないのでほんの二、三言葉を交わすのみのこともあるのだけれども、お互いちょっと時間を都合して三、四十分ほどその図書館内の喫茶店あたりで雑談とも情報交換ともつかない茶飲み話などする時間ほど気のほぐれてたいしたことない紅茶なりクリームソーダなりが甘露に感じられることはない。そういった図書館でのちょっとした遭遇が自分が目に見えないネットワークにたしかに属しているという確信をあたえてくれて、すると、いったんはよそよそしく、いわば、死者の言葉の膨大な累積の圧迫と思えばじめていた閲覧室が、もういちど、こちらを向いて何か語りかけてくれるような気持ちにもなるのだった。

つまるところ、結局紋切り型の言いまわしになってはしまうのだけれども、図書館とは、比喩的にも文字通りにも、つねに知的な出会いの場であることを、わたくしは自信をもって断言できるのである。

ときどき、これもわたくしに限らず図書館が好きだったり図書館で苦労したりしている(両者はたいてい重なる)かたならついでに考えてしまうように、いまだ自分の知らない、自分

にとっての理想の図書館がどこかにありえないものか、などということも思ったりもするのだけれども、さらに考えていくとそれはかならずしも夢想のみというものでもなく、もちろん完全な図書館というものはないにしても、たとえば、各専門資料性——これは本当に、岩瀬正雄文庫のできる前から、なんでこんな埋もれた大正期の詩人の詩集がいくつも所蔵されてるんだ!と驚かされ、そのときの私にとってはたいへん理想的な資料をそろえてくれていた豊橋市立図書館、といった、ごく限定されたジャンルでの専門性でもよい——や、建築の構造(と、いう点ではやっぱり安藤忠雄が改築=完成させた上野の国際子ども図書館が一番印象深かったろうか)、場所、そうして、大島町立図書館のような豊富な人的ネットワークなど、それぞれの部分で、すばらしい図書館というのは全国に点在しているのであるし、また、いま豊橋市立図書館のことに言及したけれども、そういう、自分の勤めている図書館の良さに各図書館員はもっと自覚的であってほしいなあと考えたりもし、それは、利用者であるわたくしたち一人一人の責任でもあるのだろう、と思ったりもするのである。と、いうわけでこれからも、図書館と出会ってゆくという(苦しみをふくめた)人生の楽しみは、つきることないであろう。



吉本隆明の出生地近辺をフィールドワーク中に見掛けたポスター

# 現代中国学部「中国民俗資料室」の開設によせて

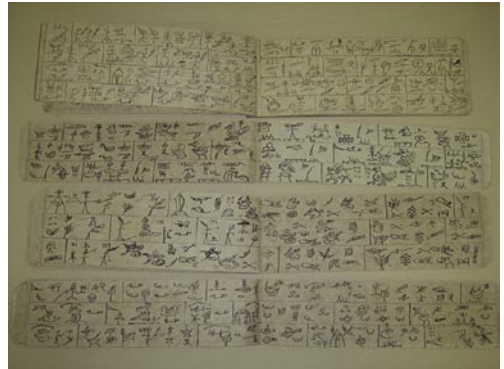
現代中国学部 松岡正子

2004年春、現代中国学部は「中国民俗資料室」を開設した。中国は、13億の人口と56の民族、日本の25倍の国土、3千年以上の歴史と文化をもち、歴史的に日本と密接な繋がりをもつ巨大な国である。このような国を、一体、どのような視点から理解すればよいのか。中国民俗資料室の目的は、民俗文化の視点から、日常生活で使われてきた民具や民族衣装、民間美術や楽器などの「モノ」を自ら見る、聞く、触れることによって、中国の生活風景や伝統文化について理解を深めることにある。

中国民俗資料室のテーマは、(1) 漢族と少数民族、(2) 女性と子供、(3) 民間美術と楽器の3つである。収藏品としては、(1) については、多数の民族集団が集中する西南中国から四川省のチベット族・チャン族・イ族、貴州省のミャオ族・トン族・スイ族、雲南省のナシ族・プミ族・ハニ族・タイ族、および漢族をとりあげ、各民族集団を代表する民族衣装や装飾品、生活用具類、宗教およびシャーマンに関する経典や法器、衣装など、(2) については、伝統的な形がよく伝えられている嫁入り道具や台所用具、茶器、子供の衣服や玩具など、(3) については、中国独特の民間芸術として、春節（旧正月）に飾る民間版画「年画」、皮影（影絵）人形や木偶人形、民族楽器など、あわせて約400点である。



雲南省シャングリラ県のトンパ



トンパ文字でかかれた経典

展示は、常設展（名古屋校舎東教室棟3階・中国民俗資料室）と年2回の企画展、およびホームページで行う。常設展では、1900年代中期の家具や民具によって漢族の「堂屋」（母屋の居間）と女性の部屋の再現を試みている。企画展は、第1回「雲南省・ナシ族展—トンパ文化と火葬」を、2004年11月13日と14日（愛大祭期間中）、名古屋校舎中央教室棟102において現代中国学部松岡正子ゼミとの共催で実施した。在校生や御父兄をはじめとして卒業生、愛大受験をめざす高校生、他大学生、近隣の方々など約350名の来場者があり、盛況であった。現代中国学部にとっては昨年の「COL採択記念—愛知大学における中国研究」に続く企画展である。第2回以降は、「中国雲南省・ナシ族のトンパ文化」（2004年12月～、名古屋図書館）、「年画展—武強と楊柳青」、「貴州省・ミャオ族、スイ族、トン族—暮らしと民族衣装」、「人形展—皮影人形と木偶人形」、「四川省・チャン族とチベット族」、「民具展」などを予定している。

「ナシ族展—トンパ文化と火葬」の内容は、つぎのようである。ナシ族は、総人口約31万人（2000年）、雲南省西北部の海拔高度1500～3000メートルの盆地や丘陵部に居住する。「ナシ」を自称としたナシ語の西部方言を話す集団と、「モソ」を自称とした東部



方言を話す集団に大別される。このうち「ナシ」集団は、人口の約9割を占め、麗江ナシ族自治県やシャングリラ県南部に分布する。明代以降、土司の木氏は積極的に漢文化をとり入れながら「ナシ古王国」を築いた。麗江古城は1997年にユネスコ世界遺産に登録された。シャーマン「トンパ」を中心とした「トンパ教」と象形文字「トンパ文字」に代表される「トンパ文化」が内外に知られている。これに対して「モソ」集団は、寧蒗県のロコ湖周辺に居住し、「アチュ婚」とよばれる妻問い婚を行い、母から娘へと家を継承する母系社会を形成する。シャーマン「ダバ」を中心とした土着の自然崇拜とチベット仏教を信仰し、ラマの誦経のもとで火葬を行う。またモソ人は、自分たちがナシ族の一支系ではなく、独立した民族集団であると主張する。

「ナシ族展」は、今夏、シャングリラ県東壩村と寧蒗県ロコ湖でフィールドワークを行った松岡ゼミの学生17人によるパネル報告と、資料室が現地で収集した民俗資料の展示からなる。松岡ゼミは、2000年から毎年、雲南省社会科学院などの協力を得て雲南省や貴州省を中心に中国語によるフィールドワークを行っている。今回のパネル報告では、「ナシ」については家族・食・住・教育・トンパ・古楽・トンパ文字、「モソ」についてはアチュ婚・火葬を小テーマとして、現地で得た映像資料や聞き取り調査の結果をまとめた。なかでも現役最高齢の老トンパ（91歳）へのインタビューや、住民が頭痛を治してもらいにトンパを訪れた時の治病現場の記録、出棺から火葬場までの火葬の実録は、それらに遭遇してきたこと自体が強運であり、フィールドワークならではの価値がある。学生たちは現地での経験に加えて、会場で来場者の質問に答え、説明することによって一層確かな何かを得たものと思われる。指導教官としては、御父兄が多数来場され、学生の説明を受けながら楽しそうに展示をみておられたことが大変うれしかった。

中国民俗資料室が収集・展示した民俗資料は、「ナシ」と「モソ」の民族衣装、トンパ教の経典や法器、儀式用の「神路図」「木牌画」「巻軸画」である。民族衣装には、山間部の東壩村と都市部の麗江、ロコ湖落水郷のモソ村

の3つの地域で暮らす老若男女の日常着とハレ着、シャーマン「トンパ」の儀式衣装が含まれる。山間部では麻を栽培して糸を繕い、男女とも日本の着物に似た長着を帯紐で巻いて留める。麗江では男性はヤギ皮のベスト、女性は太陽と月と7つの星を表す飾りをつけたヤギ皮の肩掛けをかける。モソの未婚女性は真紅の短い上着に白いプリーツスカート、華やかな花の髪飾りをつける。民族衣装は帰属集団の違いを表すだけでなく、集団内での位置やなすべき役割、地域の自然や生活を反映しており、興味深い。

トンパ教の「神路図」や「木牌画」、「巻軸画」（タンカ、麻布に鉱物顔料を用いて描いた神像画）、トンパ文字でかかれた経典は、今回の展示品の中では最も資料的価値が高い。「神路図」は、ナシ語で「ハリ」、幅約23センチ、長さ約630センチ、紙製（ナシ族独自の紙漉きによる）で、葬儀や「超度亡霊」（施餓鬼）の時に靈魂を導く道として用いる。33の天界と人間界、18の地獄界を百余りの連続画で描く。「木牌画」は、ナシ語で「クピャ」、幅約10センチ、長さ約60センチ、マツの板製で、地面に挿して神壇を作る。神々を描いた先端を尖らせた形のもの、鬼を描いた先端の平らな形の2種類がある。これらはトンパが自ら描き、あるいは代々伝承してきたもので、儀式によって使用する木牌が異なる。今回の「神路図」は百年以上伝えられてきたとされ、「木牌画」も作者の老トンパがすでに故人であるため、ともに極めて貴重である。なおトンパ関係の資料は、12月より名古屋図書館にて展示を予定している。



ナシ族展—トンパ文化と火葬—

## 好きな場所

国際コミュニケーション学部

王 華 坤



私は中国から来た留学生で上海外国語大学でも勉強したことがあります。日本に来てびっくりしたことはいろいろありますが、なかでも勉学にかかわることといえばやはり図書館だと思います。なぜなら、図書館がこんなに便利に使えるとは来る前にはぜんぜん想像がつかないほどですから。設備内容の良し悪しはともかく、図書館が確実に学生たちに使われているという点がもっとも重要ではないかと考えています。実は上海の母校の図書館は最近建てられたばかりです。けっこう立派な建物であるわりに、使用率があまり高くないようです。別にみんな勉強が好きでないわけでもないのですが、そうなるのは開館・閉館時間の合理性が欠けているのです。平日の閉館時間はほぼ授業の四限目と同じくらいですから、もちろん学生たちは授業の終わったあとに行けないでしょう。しかし、留学したのがきっかけで、私には図書館の新しいイメージを与えられました。まず、開館時間は本当に学生の都合に合わせるよう心がけていますね。授業が終わった後、一回夕食を食べに学校を出たとしても、まだもどってきて利用する余裕があると思います。ちなみに、私は日本に来た初めのころは言葉もよく通じないですし、友達もできてなくてよく悩んでいました。ところが、図書館の3階には懐かしい雰囲気がかんがえて心慰められました。寂しいときにもここで中国語の小説を借りて読みながら、不慣れな心を落ち着かせて日々を無事に送りました。これからも、毎日必ず行きます。勉強する以外にも、インターネットで友達とメールを交換したり、チャットしたりしてリアルタイムの母国に窓を開くこともあります。

図書館は本来の意義は図書、記録その他の資料を収集、整理、保管およびそれらを必要とする人の利用に供することです。しかし、時代が移り変わるにつれて図書館も変わらなくなりません。今の愛大図書館はまさにその良い典型として存在しています。そのように思う留学生は多分私だけではないでしょう。

## 〈温もりのある図書館を〉

大学院文学研究科

松 村 美 奈



書架をぐると眺める。そういえばあの本はこの辺りにあったはずだが……見当たらない。コンピュータで検索してみる。そしてまた書架を眺める。見つかった！では次に奥の書庫に入ってまた別のあ

の本を探してみるとするかな……。

とにかく私は館内を縦横無尽に移動する。周りからはきつと落ち着きのない人間だと思われるだろうが、自分はそんな風に回り道しながら色々な本を探していく過程が好きなのである。今の図書館は蔵書データベース等も充実し、検索にさほど時間はかからなくなった。しかし、その液晶画面に現れた文字を頼りにただ本を探し、見つければ「ハイ、ソレマデヨ……」ではなんとも味気ない。この巨大空間に何万冊もの書物が納まっているのだ。どんな本が眠っているのだろうか？想像するだけでワクワクする。そんな未知なる書物の存在をじっくり体感したいという願望から、探す楽しみを見出し、図書館内を歩き回ってしまうのだ。

私にとって図書館は書物（資料）と自分を繋いでくれる大切な場所である。自分の研究の性質上、古い書籍等を扱うこともあるのだが、こういった類は煩雑な手続きを伴う場合が多い。そんな時にはいつも係の方々助けられている。このように幾重にも人の手が介在することで、私は未知の資料と出会うことができるのである。このことを心に留めて書籍を繙きたいと思っている。

これからの図書館は、今よりもコンピュータ化が進み利便性を追及してゆくことになるだろう。しかし行き過ぎれば表情のない図書館にもなりかねない。愛大図書館には、無機質な冷たさなど似合わないと思う。どこかホッとするような温もりのある〈風景〉を残してほしいのである。事務的な対応が迅速になることは大変有難い。しかし一番大切なのは利用者との相互関係が常に円満であるということに尽きる。そしてこれから先、どんな人に対しても平等に「知への扉」を開け放しているような、懐の深い図書館となっていくことを私は望む。

## 外部記憶装置としての図書館

大学院中国研究科 湯原 健一



「いつもそうだが、何十年も前の昔の論文を読むとき、紙の間に閉じ籠められていた時間が紙面の上で膨れあがり解放の喜びをもって流れ出てくるよ

うな感銘を覚える」

加賀乙彦の小説『宣告』の一節である。若き精神医近木生一郎は拘留所の医官として死刑囚たちの処刑に対する恐怖心という心の闇と対話を繰り返す。そんな拘束状況における精神的病理を新たな症例として報告するとき、彼は自分の母校の図書館を訪ね、過去に書かれた論文に目を通す。『病的着想について』と題された論文は1904年の『ドイツ医学週報』という雑誌の中に何十年もの間、彼に読まれるのを待ち続けるかのようにあった。そして、述懐する。「近木は、自分の書いた論文を、五十年後、百年後の若い学者が読む場面を想像し、学問とは何と奇妙な伝達をとげることかと思う」と。

学問とは、まさに先人たちとの対話である。「ドイツの学者は六十数年後に、極東の若い精神医が自分の論文に読み耽るなどと考えもせず、極東の精神医は自分が見た患者と同じ症例をすでに六十数年前にドイツの学者が報告していたことに驚く」ように学問という知識の連環は、途切れることなく、過去から現在へと続いていく。それは図書館という場が、絶えることなく脈々と人間の思想やアイデアを受け継いでいくからである。人間の文明を「思想-図書-図書館」という流れで捉えるならば、図書館の役割は、歴史に欠くことのできない文明の「環」であり、人類の知識を蓄え、再生する外部記憶装置である、ということができるのではないだろうか。その意味において、図書館とはまさに、人間の知識や思想を図書という形で受け止め、蓄積し、それをさらに新しい思想、知識の再生産のために提供する場所であると言える。

## 知性を通じて

法学部2部 後藤 睦恵



本のある場所に惹かれるのはなぜだろうか。

人には空間認知という能力がある。周囲の物事を認知する五感以上の触手を具える。直接に触れることなく、存在

を感じられる能力ともいえる。私たちは本を単なる物質以上の存在として感じてはいないだろうか。そこに人間を感じてはいないだろうか。

言葉だけが知性を伝える。本は人間の知の魂だ。あるひとつの研ぎ澄まされた世界がそこにはある。心地よい隣人を、手に取り、扉を開く。優れた知性を通じた出会いがある。

物と情報があふれる時代において、二千年の時を経た本の価値はいかばかりか。時が厳選して、受け継がれてきた確かな価値。時代とともに変わっていくこと。変わらないこと。

私はどれ程の世界に出会えるだろう。この図書館のわずか1%の世界でさえも、知ることなく終わるだろう。しかし、それは大きな喜びだ。ちっぽけな自分の存在の確認と、この世界の豊かさへの確信。今という時が、過去より優れているわけでもなく、未来よりも劣っているわけでもないという確信を持つ。

古い判例集の中には、その時代がある。そこで生きる人々の意識がどうであったか、何が常識であったのかを窺い知ることができる。茶色くなったページが、今は使われなくなった言葉が、時の流れを感じさせる。しかし、そこにある知性が色褪せることはない。

本は時を留める。その蓄積の豊かさは、この大学と私たちにとって財産である。



海外研修報告：

## アメリカ有名5大学図書館を訪問して

豊橋図書館 成瀬 さよ子

私は2004年9月10日から約1ヶ月間、職員の海外研修制度を利用してアメリカのハーバード大学・プリンストン大学・ミシガン大学・カリフォルニア大学バークレー校・ハワイ大学マノア校を訪問してきた。

目的は2つあり、第1の目的は『幻ではない名門校＝東亜同文書院大学』が確かに存在したことを、愛知大学に引き継がれた資料を掘り起こすことで実証し、さらにアメリカにおける研究者達に東亜同文書院への関心を呼び起こす事ができればと大胆な目的を抱いた。既に数年前から「東亜同文書院大旅行誌」を調査していたので、検索ツールをWeb上に公開した。(2004年3月) さらに『東亜同文書院関係目録』の冊子体を作成することを自己に課し、渡米3日前に完成させた。これをお土産として、5大学のアジア図書館のライブラリアン及び日中近代史研究者に配布することとした。第2の目的は、愛知大学図書館の今後のあり方を模索することであった。2004年4月より業務の一部がアウトソーシング化され、後継者不足と人手のかかる図書館ガイダンスのあり方が問題となっていた。

### 1. 東亜同文書院について

最初の訪問校であるハーバード大学は、全米で最も古い伝統を持った名門私立大学である。世界で最も大きい図書館の1つといわれているワイドナー中央図書館は、一般には公開していないので、学外者は容易には入館できない。図書館内では写真など一切禁止。出口にはブックディテクションがあるにもかかわらず、利用者全員の鞆・袋物の中身を厳格に調べていた。かなり閉鎖的で敷居が高いなと感じたが、イエンチェンやロースクール図書館職員は皆親切であった。とりわけフェアバンク東アジア研究所では、大変なもてなしを受けた。私が訪問したときには、既に4冊の分厚い図書が机上に準備してあり、所長のWilt Idema教授は、中国文学の研究者であったが私の作成した『目録』を欲しいと言われた。続いてランチに招待され、アメリカ各地から参加しているフェアバンク研究者の前で「日本の愛知大学から東亜同文書院について研究しているライブラリアンが訪問してくれました」と副所長のRonald Suleski博士が紹介してくれた時には恥ずかしくて小さくなっていた。この研究者の中に『知の帝国主義：オリエンタリズムと中国像』で有名なPaul A. Cohen教授もいて、李春利先生が愛知大学と東亜同文書院の関係や、『目録』の事を詳しく説明して下さった。(写真1)

ミシガン大学では、調査したい事項があった。1960年以前に既にアメリカでは『支那省別全誌』(東亜同文会)をマイクロ化してUMI社が販売していた。ミシガン大学収蔵の図書を原本としたことまで判明しているの、いつミシガン大学では収蔵したのかを知りたいと考えていた。(UMI社は、1938年創設当初ミシガン大学内にあ



写真1

り、学位論文の複製を主とし現在はProQuest社という。) ミシガン大学は、アナーバー全体が学園都市となっていて、北・東・中央・南とキャンパスが複数ありキャンパス間はスクールバスが走っていたが、私は歩いてSouth Campusの保存書庫まで出かけた。『支那省別全誌』は、すぐに閲覧できタイトルページに1949年9月25日の日付が記されていた。(写真2) アジア図書館長の仁木賢司さんにも確認したが現物に記載されている方が珍しいことであると言われた。ミシガン

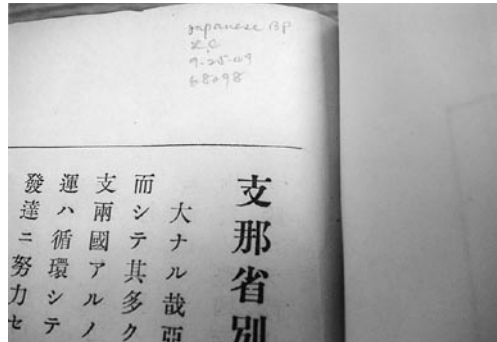


写真2

ン大学では、1947年に全米で初めての日本研究センターが設立されている。アメリカで最も古い歴史を持つ日本に関する研究機関が、いち早く東亜同文書院の学生たちが書いた手書きの卒論を基に出版した『支那省別全誌』を購入し、また他機関から要求があつてマイクロ化していたことは特記するに値しよう。

私はこの他すべての図書館でいくつかの所蔵調査をしてきたが、残念ながらコピーを取ることが出来なかったため、帰国後改めて調査した。この調査結果は予想外であった。私が作成した『目録』の中に全く載っていない資料が4点カリフォルニアとハーバード大学で発見された。国内の大学や研究機関では全く発見されなかった資料である。また他に6点本学にはない資料があつた。それにしてもさすがハーバード大学は、中国研究においては全米一の収蔵冊数(62万冊)を誇る大学である。最も多い調査結果であった。

5大学比較	創立	蔵書 万冊	日本語 万冊	東亜同文会・ 東亜同文書院 刊行物 件	支那経済全書 1907-	支那省別全誌 1917-	中日大辞典 1968・1987
ハーバード	1636	1400	28	62	所蔵あり	所蔵あり	1987
プリンストン	1746	500	16.3	26	所蔵あり	所蔵あり	1968
ミシガン	1817	780	25.5	45	所蔵あり	所蔵あり	1968・1987
UCバークレー (UC全体)	1868	900 (2980)	40	47	所蔵あり	所蔵あり	1968・1987
ハワイ	1907	320	?	14	所蔵あり	3巻のみ	1968

帰国後、カリフォルニア大学のサンタバーバラ校(訪問校ではない)のJoshua Fogel教授(有名なこの先生の著作物は、日本語訳も複数あり『内藤湖南ポリティクスとシノロジー』等本学に13冊の図書を所蔵していた。)から『目録』の送付依頼があつたし、オハイオ大学のShao Dan教授からも『目録』と「東亜同文書院に関する入手可能なリスト作成」依頼があつた。予想を超える東亜同文書院への関心の高さであり、訪米効果は嬉しいことに今後も続きそうである。

## 2. 愛知大学図書館の今後のあり方

### <ガイダンス>

ハーバード大学イエンチェン図書館では、ガイダンスは年1回行っているのみで、図書館側が熱心に行う必要がないとの答えだった。「学生は勉強をするために大学に来ていることを熟知し

ている。」と言われた時には正直はっとした。

ハワイ大学では、ライブラリアンの講義を見せてもらった。「Bibliographical and Research Methods Japan」という院生の課目でオンラインリソースを使った第10回目のTokiko Bazzellさんの授業だった。担当教員のLawrence Marceau教授も一緒にアドバイスや質問をしていた。内容的にはそれほど目新しいものではなく本学でも行っているデータベースの内容の説明や使い方の実習であった。ただし、単発ではなく体系的に行われていること、また最終目的は修士論文作成のためテーマに沿った参考文献一覧を提出させることで、図書館側のねらいと授業の内容が一致していてすばらしいと思った。我々が図書館ガイダンスの中で行っている資料やデータベースの使い方を、目的を明確にした体系的な授業に組み込むというのは可能であろうか？総合学習の中で、それぞれテーマごとに学生を集め、毎回図書館の資料やデータベースを使って回答させていく授業は面白いと思われる。例えば、「東亜同文書院」についてならば、大旅行誌の検索データベースから本文にアクセスする。文中の分からない言葉・人名・地名・歴史的背景等の調査をする。図書館職員も一緒に参加し、学生は毎回発表し報告書を提出する。最終的にはどのような資料を使って何について調べたのか一覧表を作成させる。これを図書館としては、主題ごとにまとめパスファインダーを作成する。図書館の資料やデータベースを使わなければ授業が成り立たないというような方法であれば、図書館はもっと必要とされる場所となる。学生が早くから勉強方法を身につけることは、その後の学生生活を有意義なものにできる。図書館職員にとっても主題知識を蓄積出来、カウンターでのアドバイスに役立つ。職員数は減員されたが、今後もより効果的なガイダンスのあり方を模索し続けたい。

#### 《お詫び》

前回の『韋編No. 29』にて継続を明記した「東亜同文書院関係目録」は、あまりに膨大なため(全61頁)2004年9月に限定100部の冊子体目録として作成(既に品切れ)しましたので、『韋編』では継続しません。悪しからずご了承ください。

## 中華人民共和国教育部からの寄贈図書

中国政府より、愛知大学の中国語研究や教育に対する支援として、中国語図書1000冊が寄贈されました。内容は小・中学校の教材、文学・語学、辞典、録音資料など多義に渡っています。豊橋図書館と名古屋図書館各500冊を受入れ、展示しました。





## 村上文庫 (刈谷市中央図書館内)

現代中国学部助教授 松尾肇子

村上文庫の名前は、刈谷藩の藩医だった村上忠順（ただまさ）の蔵書を取蔵することにちなんで付けられた。1812年に現在の豊田市に生まれた村上忠順は、刈谷藩主の侍医だった父の後を継いで藩医となり、維新後には明治政府の下でしばらく国学の指導にも当たった。こうした個人の蔵書は、その人が死去すると売りに出され、ばらばらになってしまうのが常である。1884年に忠順が没すると、その蔵書もあやうくこうした運命をたどるところだった。その難を救ったのが、当時刈谷町の医師穴戸俊治と町会議員藤井清七の二人である。1914年彼らは一括購入した忠順の蔵書約25000冊を町にそっくり寄贈したばかりでなく、城町の亀城小学校（郷土資料館として保存されている）の隣に木造2階建ての書庫と閲覧室を立てた。1917年には、町立図書館に発展した。穴戸に教えを乞いながらその整理に当たった森銑三は、町の予算が無くなった後は穴戸が給料を出してくれたと、思い出を語っている。このとき森銑三が作った目録は、「刈谷町方文書目録」とあわせて、1978年に『村上文庫図書分類目録』として刈谷図書館から出版されている。1994年には刈谷駅から徒歩10分ほどのところに、美術館と並んでモダンなデザインの刈谷市中央図書館が建設され、その2階に、村上文庫のための出納・閲覧室が整えられて、移管された。図書館のホームページからオンライン検索もできるようになっている。

さて、この村上文庫の特徴の第一は、3000冊にのぼる豊富な医書である。江戸時代の医学の基本であるたくさんの漢方鍼灸の図書のほかに、着色で解剖図を載せた蘭学書の写本などもあり、新知識を勉強した忠順の姿が窺

われる。忠順は藩主を説得してその子に種痘を接種しており、これらは実際に役立てられた学問だったことがわかる。

ただ蔵書の数をいえば、文学語学関係の本が7400冊と最も多い。忠順は医者として必要だった漢学だけでなく、和歌や絵画も先生について学んだ。藩医となってからは、藩主や藩士に『論語』や『老子』、『源氏物語』などを講義し、和歌も指導した。蔵書には、尾張藩の神谷三園が写した鎌倉時代の辞書『塵袋』や、江戸初期に日本では珍しい木活字を用いた直江版『文選』など、数えるほどしか残っていない貴重な本がある。ことに直江版『文選』15冊は当時の題簽もそのままに、今刷り上ったばかりのようである。村上文庫の特徴の第二はほとんどの本に忠順の書き込みがあることだが、その美しさを愛したのか直江版『文選』には全く書き入れがない。

また、国学者・歌人として忠順自身が著した400冊近くの本も取蔵されている。そのうち『古事記標註』は1874年に出版され広く読まれたもの。そのほか彼自身が写した数千冊にのぼる書籍も取蔵されている。村上文庫は以前から知られるにもかかわらず、まだ個々の本が紹介されるにとどまっており、村上忠順の学問の全体を見渡す調査が待たれる。

所 在：刈谷市住吉町4丁目1番地

電 話：0566-25-6000

開館時間：午前10時～午後6時

月・第4金曜、祝日の翌日休館

交 通：JR・名鉄とも刈谷下車、徒歩10分

ホームページ：

<http://www.city.kariya.aichi.jp/library>

編集・発行 愛知大学図書館

2004年12月10日発行 No. 30

■豊橋図書館 〒441-8522 豊橋市町畑町字町畑1-1 ☎(0532) 47-4181  
■名古屋図書館 〒470-0296 西加茂郡三好町黒笹370 ☎(0561) 36-1115  
■車道図書館 〒461-8641 名古屋市東区筒井二丁目10-31 ☎(052) 937-8116  
URL <http://library.aichi-u.ac.jp>